

## ナイル系諸民族集団とナイル川一南からの視点

栗本 英世

エジプトからスーダンのヌビア地方に至るまでのナイル下流域と、ハルトゥーム以南の白ナイル上流域は、歴史的にも、人種・民族的にもまったくべつの世界のように思える。言うまでもなく、下流域は高度な古代文明が栄えた地域であり、これまた文明の香りのただよう地中海世界の一部をなす。それに対して、上流域はひとことでは「未開」あるいは「野蛮」の世界である。こうした対比は、白人（コーカソイド）＝セム・ハム系の下流と、黒人（ニグロイド）の上流という、人種・民族上の区分とみごとに重なっている。全長7000キロメートル近い大河とはいえ、ひとつの川の流域に、このような明確な断絶が存在するのは、考えてみれば奇妙な話である。

たしかに、白ナイル上流のとくにスッドと呼ばれる大湿地帯以南の地域は、19世紀後半までヨーロッパ人には未知の世界であった。この地域は、「ナイル源流の発見」をめぐる探検の舞台となったとともに、アフリカの植民地分割競争において最後に残されたパイでもあった。またこの地域には、スッドの入り口に位置するシルック王国と、ガンダ王国・ニョロ王国など大湖地方の諸王国を除けば、「文明」の証拠と呼べるものは希薄である。ほとんどの社会は、国家をもたず、経済や物質文化のレベルでも素朴といってよい生活を営んできた。

しかし、考えてみれば、こうした2元論的な観点じたい、きわめて近代ヨーロッパ的なものである。ナイル流域地域にかんする、私たちの（私の）認識は、近代ヨーロッパ的アフリカ観のぬきがい影響下にあるように思われる。このアフリカ観は、つよい人種主義的な側面をもつ。「劣等人種」である黒人の社会には自生的な発展はありえず、進歩と発展は外部から「優等人種」である白人によってもたらされるという考え方である。たとえば、イギリスの人類学者セリグマンは、1930年に初版が出版され、以降版を重ねひろく読まれた『アフリカの諸人種』のなかで、アフリカの諸文明は「ヨーロッパ人」である「ハム」がもたらしたものと断じた。彼の言うハ

ムには、エジプト人、エチオピア人などが含まれている。現在では、さすがにこのようなあからさまな人種主義は影をひそめている。しかし、私たちはこうした観点から自由になったわけではない。それでは、近代ヨーロッパ的偏向を克服し、より自由な視点でナイル流域をみようとするとき、具体的にはどのような手続きが必要なのだろうか。そしてその結果、なにがみえてくるのだろうか。ナイルの上流、中流、下流の世界の相互関連をどう捉えるかは、私たちのアフリカ認識そのものとかかわる重要な問題であるといえよう。

西アフリカ、セネガルのシェイク・アンタ・ディオップは、著書『文明のアフリカの起源』において、汎アフリカ主義の立場から古代エジプト文明をアフリカ人の手に取り戻そうとした。彼は、古代エジプト人はアフリカ人＝黒人であり、サハラ以南の諸文化とエジプト文明のあいだにはおおくの共通点があると論じたのだった。ディオップの所説は、欧米の学会からはほぼ無視されたが、再検討される価値がある。ただし、古代エジプト人と彼らの文明が「いかに黒かったか」という議論は、それ自身が相手、つまりヨーロッパ的人種観の土俵に乗ったものと考えられる。

まず話を、ナイル流域に戻して考えてみよう。焦点は、下流域と上流域の境界地帯である、現在のスーダン北部である。エジプト南部から青ナイルとの合流点（現在のハルトゥーム）までの白ナイル流域はヌビア地方と呼ばれる。エジプトにとっては南端のフロンティアであったこの地域では、紀元前2000年頃から国家形成がおこなわれた考古学的証拠があり、紀元前9世紀にはクシュ王国が勃興し、紀元後4世紀まで存続した。これらはまぎれもなく黒人の国家であった。6世紀以降は、この地にキリスト教諸国家が栄えた。13世紀以降はアラブ化とイスラーム化の波にさらされ衰退し、15世紀には完全に消滅した。16世紀以降、キリスト教国家のいわば後継者としてヌビアの南方で栄えたのがフンジ王国である。これも黒人の国家であった。

ヌビア地方と下流のエジプトとの関係は、史料からあきらかにすることが可能だが、南方の上流地域との関係は不明な点がおおい。

ヌビア研究の権威であるウィリアム・アダムスは、この地域を「アフリカへの回廊」と呼んだ。しかし、歴史家のグレアム・コナーは、ナイルは回廊というよりむしろ障壁であったと論じている。はたしてそうであろうか。ヌビア以南のナイル流域に関する私たちの考古学的、歴史学的知識はまだきわめて限られたものである。ヌビア諸語は、言語学上の分類では、ナイル・サハラ語族のシャリ・ナイル語派、東スーダン諸語に属する。この事実は、北方ではなく南方とのつながりを示唆する。

現在、東スーダン諸語の話者たちは、スーダン、エチオピア西部から、東アフリカにかけて分布する。そのなかで、ナイル川ともっともつよい結びつきがあるのは、西ナイル諸語を話す人びと（西ナイル系）である。彼らは、南部スーダンからウガンダ、ケニア、タンザニア、コンゴ、そしてエチオピアの白ナイル流域に居住する。民族集団名でいうと、西ナイル系はさらに、ヌエル・ディンカのグループとルオのグループにわかれ、後者にはシルック、アニューワ、パリ、アチョリ、ケニア・ルオなどが含まれる。彼らは文字通りナイルの民である。

ナイル系の人びとが、南方の東アフリカに拡大していったのは比較的あたらしく、紀元一千年紀のことである。けれども、南部スーダンでは定住の歴史はながく、すくなくとも彼らが他の地域からナイル流域に移動してきたとは考えられていない。彼は、牛牧畜、ソルガムを中心とする農耕、狩猟、漁撈、および採集からなる生業経済を営んできた。いずれの生業も雨季・乾季のサイクル、およびナイル川の水位の増減と深くかかわっている。たとえば雨季に冠水する川岸の畑を、乾季になって水がひいてから耕作する地域がある。収穫期になると畑はふたたび冠水している（アニューワ人の場合）。また、川の周囲の湿原は、野生稲など食用になる野生植物の宝庫であるとともに、乾季には牧草地になり、野生動物の狩場にもなる。もっとも川と結びついた生業は漁撈だろう。乾季になり減水したときに沼地に取り残された、あるいは本流に戻ろうとする魚を、漁槍、銚、ワナなどを用いて捕らえる。こうした採取経済（漁撈、狩猟、採集）は、農耕と牧畜の開始以前からナイル水系を舞台としてながい歴史をもつものと考えられる。

神話と世界観のレベルでは、川は異界への入り口であり、王や首長の起源伝承の舞台であった。川は不可思議な力に満ちた場所である。シルック王の始祖の母は、人間ノワニであった「川の霊」であった。アニューワ人、パリ人やヌエル人のあいだでは、超人間的な霊力をもった男性が川から出現し、首長の始祖になったという伝承がある。ディンカの首長の始祖は、ある女性が「川の霊」によってみごもることで誕生した。こうした観念と伝承は、ナイル系の人びととナイル川との結びつきの深さを物語っている。

こうした生活様式と観念世界が、どれくらいの間隔的深さをもつのかはあきらかではない。しかし、すくなくとも数千年にわたる歴史は有していると考えられる。食料生産が開始される以前の紀元前9000年紀から3000年紀にかけては、アフリカの湿潤期であり、サハラ砂漠は緑に覆われ、湖水の水位は現在より数十メートルも高かった。この時期の遺跡は、サハラ、サヘル、東アフリカ各地に分布するが、骨角器の銚（長さ5～20cm）と、ナマズの背骨や貝で文様をほどこした波目紋土器を特徴とする。イギリスの考古学者サットンは、この漁撈文化の担い手は、ナイル・サハラ語族の原集団であると推定した。また、アメリカの歴史言語学者エーレトは、紀元前6000年紀初期における東ナイル諸語の原集団は、北部スーダンのナイル流域であったと推定している。

この地域における農耕と牧畜の歴史は古い。現在のハルトゥーム郊外のナイル河畔にあるカデロ遺跡は、紀元前3500年から3000年にかけての集落跡である。ここからは、大量のウシ、ヤギ、ヒツジの骨とともに、モロコシ、シコクビエ、トウジンビエなどの穀粒痕のある土器が出土している。これらの穀物が栽培種であるとしたら、アフリカにおけるもっとも古い栽培の証拠である。この地域の食料生産は、日本よりも長い歴史を有しているのである。

すくなくとも数千年から1万年におよぶ時間のなかで、白ナイル中・上流域の主役であったのは、ナイル・サハラ語族のシャリ・ナイル語派、東スーダン諸語の話者たちであった。食料生産の考古学的証拠からもあきらかなように、彼らの歴史は決して停滞していたわけではない。彼らとナイル下流域の人びとの交渉史の解明は、今後の研究の発展に待つところがおおいが、たんに北から南を見るというのではなく、双方向的な視点が必要であろう。

（くりもと えいせい 大阪大学）